

1/17 秋田県木材流通センター 委託販売勉強会 及び 1/27 第28回東日本銘木展示大会 初市見学会

1月17日(火)、当支署の販売事業における昨今の木材需給状況について、知見を深めるため、販売委託先である秋田県木材流通センターにて勉強会を開催しました。

勉強会では、秋田県森林組合連合会の職員である小野課長を講師として、秋田県木材流通センターでの買い手側の木材利用状況について聞き取りを行い、市場の動向や、今現在どういった丸太が求められているのかを確認しました。



販売課 小野課長から聞き取り 市場の動向を確認

また、現地にて実物のスギや広葉樹の丸太を見学し、小野課長から木材を評価するための見方・考え方を勉強することができました。



スギ材について

「節の付き方が悪くない材は売れている。」
「値が付かなかった材を見ると、心材の目が粗く、枝が強くて(木口が)同心円状になっていない。」
「買い手は節を見る。また、辺材より心材の色目・幅をよく見ている。」



広葉樹について

「床材や家具材で利用されているので、コナラ、クリ、サクラに需要がある。」
「ナラ枯れ材も、菌床として需要がある。」
「ブナは床材や建具等の需要があるのだが、国有林以外から出材されることは殆どない。あれば是非、お願いしたい。」

また、1月27日(金)には、秋田県銘木センター(能代市)にて開催された、第28回東日本銘木展示大会 初市特市を見学しました。

当日は米代東部森林管理署から出材された111年生の(高)(国)秋田杉、「あきたの極上品」が出品されており、貴重な材の競売を見ることが叶いました。



会場に並ぶ(高)(国)秋田杉



外皮に「あきたの極上品」ロゴマーク

会場に並んだ「あきたの極上品」は径級が46cm～58cmであり、すべて曲がりのない美しい材でしたが、落札単価は20,000円/m³から60,000円/m³まで、3倍の価格差が生じました。

この違いについて、競売の参加者にお話を伺ったところ、以下のような内容をお聞きすることができました。



- ・1号物件は赤みを帯びており、山の中腹で育った木に多く見られる。
- ・3号物件は黒ずみがあり、谷で育った木に多く見られる。
- ・最終的には一般顧客に届くため、材の色具合で判断する所は大きい。
- ・もちろん、節や年輪の詰まり具合も見ている。峰や尾根で育った木は風の影響を受けている事が多い。

これらを聞いてから改めて材を見ると、「なるほど確かに・・・」と唸らせてしまいました。また、それ以上に、切り口を見ただけで産地の状況まで想定される、参加者の皆様の経験値に圧倒されました。

17日の秋田県木材流通センターと、27日の秋田県銘木センター、二つの市場を見学し、我々も木材を見る力を勉強させていただきました。